

ポスト多文化主義時代の共存：

現代カナダにおける先住民－非先住民の関係再生の空間へ／から

鈴木 昶生

本稿が取りくむのは、「対立するカテゴリに分け隔てられた人々はいかに同じ社会空間で共存しうるか」、という問いである。本稿ではこれを「カテゴリと共存の問い」と呼び、この問いにかんする諸問題を検討していく。たとえば、「有色 (colored)」とされる人びとに対する構造的レイシズム (居住や職業等にかんする初発からの不平等や差別) や偏った警察暴力、ムスリム女性がヴェールをかぶることをめぐる偏見と過剰な論争、先住民女性に不均等なおおい失踪・被殺害数など、人びとのあいだの「人種」・「宗教」・「文化」等々のカテゴリをめぐる不平等・対立・衝突は現代社会のいたるところであらわになり、問題化されている。こうした問題に応じ、同じ社会空間を共有する異なる人びとがいかに共存していけるか、というカテゴリと共存の問いを理論的・経験的に探究することが、現代の人文科学・社会科学におけるひとつの重要な課題となっていると筆者はとらえる。

この課題に応じる切り口として、本稿の第一部では、多文化主義研究の成果をふりかえる。なぜなら第一に、多文化主義はカテゴリと共存の問いに応じるひとつの鍵概念であるため、この概念をめぐっておこなわれてきた研究の遺産は、この問いをめぐる考え方や知識のゆたかな源泉を提供してくれているからである。第二に、多文化主義的なカテゴリのとらえ方や共存の考え方には鋭く有益な批判が寄せられており、これらの批判を参照することで、この問いに応じる重要な理念・実践としての多文化主義の挑戦と限界に学ぶことができるからである。第一部では、以上ふたつの利点をもった多文化主義研究への再訪をとおり、カテゴリと共存の問いに応じる準備作業をおこなう。

この第一部の作業をとおして得た知見を活かしながら、第二部はカナダにおける先住民と非先住民の共存を事例に、カテゴリと共存の問いをより具体的な次元に落として考えていく。さまざまなカテゴリの人びとがともに生きるカナダという国では、カテゴリと共存にかんしてゆたかな経験や思想がみられると同時に、国民国家への統合を前提とするリベラルな多文化主義の限界も明らかにされてきた。とくに先住民という存在に注目すると、この

限界が明瞭になる。どういうことか。まずはこの事例選択の理由を、順に説明したい。

先住民の政治的存在は、北米やオーストラリアのように入植者の植民地統治によって成立する国家（入植者国家: *settler states*）の正統性自体をゆるがす。入植者国家は先住民が暮らしてきた土地の奪取によってはじめて成立し、その基盤のうえに形成されているため、いわば先住民に対する原理的な負債を抱えこんでいる。ゆえに先住民の政治的存在はそれ自体が、国家の負債を呼び起こしその正統性に疑義を突きつけるのである（3章）。

こうした性格をもった国家に統治される公的空間において、その空間を存立させる構造自体を問いに付す先住民のような存在と非先住民が良好な関係を築いていく道は、国家理念としての多文化主義によっては十分に見出しえない。というのもカナダが主導してきた多文化主義は、先住民が問題化するような入植以来の不正義や不平等な権力構造に反しない限りで関係構築の方法を模索する、限定された共存の理念だからである。そのため、先住民（社会）と非先住民（社会）がいかに関係を築きなおすかという問いに応えることは、必然的に、カテゴリと共存の問いに対して公定の多文化主義とは異なる応じ方を要請とする。

この異なる応じ方を探るにあたって、カナダにおける先住民－非先住民関係の事例はゆたかな可能性を示している。とくに近年の先住民運動は、土地の「要求」や権利の「承認」といった多文化主義的な諸制度にのっとりばかりでなく、制度的回路から距離を置く、つまりは国家に水路づけられたものとはずれる仕方で運動ネットワークを組織し直接行動をおこなっている。先住民だけでなく非先住民の支援者が入りまじるこのような運動の場では、両者が民衆の水準で出会い関係をはぐくんでいる。本稿はこうした草の根の実践のなかに、国家主導の多文化主義的なやり方とは異なる関係再生の可能性をさぐる（5章）。

以上のような実践的意義に加えて、カナダを対象地域に選定することには思想的意義もある。カナダは世界に先駆けて多文化主義が国家レベルの政策、国民国家の公的なイメージとして位置づけられてきたために、この状況に応じてウィル・キムリッカやチャールズ・テイラーの議論など、現在なお世界的に参照されつづける多文化主義の主要な「理論」がうみだされてきた。問題は、これらが世界的に普及するなかで、あまりに一般化されたかたちで参照されるようになったことである。その結果、思想は思想家たちが自らの立ち位置において紡ぎだした個別具体的なものであるにもかかわらず、そうした個別性を無視して妥当する「一般理論」のようにあつかわれるようになってしまっている。本稿は現代カナダの政治社会的状況と、この状況に対して多文化主義思想とは別様の問題設定の仕方を提起する先住民思想家たちの議論を参照することで、過度に一般化された多文化主義思想を文脈に差しもどして相対化する。この作業をとおして、カテゴリと共存の問いにかんして単一化され

た問題設定の偏り、そして別様の応答可能性を示すことで、この問いに対する応答の仕方を複数化することができる（4章）。

はじめに1章では、国民国家の他者する理念として多文化主義を位置づけ活用しようとする編入の社会学を概観したうえで、こうした編入志向から距離を取ってきた多様な多文化主義研究の蓄積を掘りおこし、本稿に活用しうる視点や論点を取りだしていく。まず1節では、編入の社会学の現代的展開として注目しうるふたつの潮流、すなわちジェフリー・アレクサンダーからピーター・キヴィストに至る編入様態論（1-1項）、タリク・マドゥードを中心に「ブリストル学派」とも総称される一連の多文化主義論（1-2項）を押さえる。これに対して2・3節では、そうした議論や実践の枠組み自体に批判的な諸研究の潮流が整理される。具体的には、2節では多文化主義の編入的性格に疑義を投げかけた批判的多文化主義論、3節では国家への編入ではなく日常的共存に注目する日常多文化主義研究などが取りあげられる。先住民のように国民国家への編入そのものに異を唱える人びとに着目し、編入論に批判的な本稿では、2・3節でみる別様のアプローチが以降の行論へとつながっていく。

2章では、カテゴリによる人の生の決定性と非決定性を同時に視野に入れながら、対立のカテゴリに分けられる他者同士の関係構築をさぐる社会思想を探究する。この作業は具体的には、人類学者・社会思想家ガッサン・ハージの議論を介しておこなわれる。編入論的な多文化主義言説の批判者としてひろく知られるハージだが、本稿ではむしろ彼が近年展開する「オルタ論」に注目し、これを本稿全体を貫く視点として活用していく。このオルタ論は植民者／被植民者、勝者／敗者といったカテゴリ的対立の思考のみでは敵対関係から抜けだせない状況に対し、人びとがそのみに囚われずに関係を築く可能性を示す。2章ではこの試みを、身体を介した現実経験の多元性や身体の柔軟性といった点をその中核とみなす見地から再構成する。1節ではまず、オルタ論にとって基調となる発想を具体例を交えて説明する。2節ではハージ自身のオルタ的探究のまとまった議論として、多文化主義批判の先に彼が模索する存在様態の議論に照準をあわせ、彼が十分に論じていない点も補足しながらこれを再構成する。3節、4節では以上のハージの議論をあらためてみつめなおし、現実経験の多元性や身体の可変性に注目する思想として、筆者自身の視点からオルタ論のイメージや本稿での用い方を明確化する。

以上の第一部からカナダにおける先住民－非先住民関係を事例とする第二部へ移行するが、このままでは両者はスムーズに接続されない。そのため本稿では2章と3章のあいだに移行部を設け、ここで第一・二部の接続関係を明瞭にする。

3章では以降の行論の政治社会的背景として、カナダにおける先住民をめぐる政治状況の

変遷を重要な点にしぼって再構成するとともに、現代先住民運動の動向を概観する。1960年代以降のカナダにおいて、入植者政府（カナダ連邦・州政府）にとって従来は明らかに「同化され消えゆく者」であった先住民の政治的位置づけは、先住民による土地闘争の隆盛やその結果出された判決等に影響され、「固有の権利を承認されるべき者」へと変わっていく。しかし同化から「承認」へ、と特徴づけられるこの変化も、先住民の政治勢力を無力化し土地の収奪をつづけるという、入植者政府を基礎づけ突き動かす植民地主義を変えたわけではない。3章ではこの表面上の変化と、入植植民地統治の構造上の連続性をとらえる。まず1節で1969年以降という本章が対象とする時期設定とその理由が述べられたうえで、2節では「承認の政治」の制度化と主流化、その問題点について先行研究の成果をまとめながら論述する。3節ではカナダ政府によって先住民と非先住民、国家との「和解」が提唱される1990年代以降の状況を述べ、この政府主導の「和解」に異を唱えた Idle No More という先住民運動の姿を描き、4節で小括をおこなう。

3章を土台として、つづくふたつの章では、序章で導入された先住民・非先住民をめぐる「再起」と「和解」をキーワードとして、先住民思想・運動の研究にもとづく議論が展開される。先住民独自の価値にしたがって先住民の生・社会を再創造しようという再起、先住民と非先住民の関係の再生を図る和解は、それぞれカテゴリと共存という本稿のふたつテーマと重ねて考えられる。第二部は両者に注目しつつ考えてすることで、第一部で概論的に展開したカテゴリと共存の問いに対する本稿の議論を、より具体的な文脈に落としこんでいく作業となる。

4章ではカナダ出自の多文化主義論者の思想を再起の思想と対比させ、両者がいかにその前提から異なるかを明らかにする。再起の思想は植民地統治が社会のすみずみまで浸透することで当然視されるようになった支配的な社会認識や価値を一度学びほどこき、自分たちにとって重要な価値や倫理をあらためて選びとり創造し、先住民の社会と生き方を再構築していく。このように先住民の立場に立った再起の思想と、入植者国家の構造を所与とする多文化主義思想、これらの前提から異なる思想同士を対比させることで、本章は両者がよって立つ思考の基盤（発想や世界観）の相違を浮きぼりにし互いに相対化させる。この作業をとおして、先住民が示す差異が国民的同一性へと回収されるひとつの偏差に過ぎないのでなく、思考や実践の前提、価値といったより根源的な次元の差異をふくんでいることを示す。まず1節では、この比較を方向づける「思想の対話」という基本的アイディアを述べる。次に2節では、再起という概念を明確に打ちだしひろめていく中心となったアルフレッドの思想を、再起の思想群におけるひとつの起点として導入する。そのうえで3節では、そ

れぞれキムリッカとシンプソンの思想を、女性の自由と文化的規範の相克という争点を軸に比較対照していく。4節ではこれらの議論を簡単に総括する。

5章では、筆者自身も部分的に訪問・参加したウェツューウェテン（Wet'suwet'en）主導の反パイプライン運動を事例として、草の根の和解の可能性について論じる。カナダ最西部に位置するブリティッシュ・コロンビア州、その内陸部の土地と関係をもつウェツューウェテンの人びとは、かれらの関係する土地の真ただ中を横切る石油・天然ガスパイプラインの建設に抗する運動を展開してきた。一部の人びとは建設予定ライン上にキャンプを設置し暮らすことで建設を阻止するという直接行動を開始し、この活動はすでに10余年つづいている。この運動の主体・運営役は先住民だが、運動参加者のおおくは多様な非先住民であり、そこではさまざまな人びとが入りまじるまさしく「多文化」な空間が形成されている。5章ではこうして先住民・非先住民がともに生きる空間に、国家主導のものとは異なる関係再生の契機を見出す。まず1節では、議論の背景となる状況を概観する。そのうえで2節では筆者が実際に訪問したキャンプの内実に踏みこみ、おおきな対立の語りからはとらえられないような、共同生活における潜在的な関係再生の可能性を示す。3節では、以上の描写を前章までで展開してきた議論とむすびつけながら、キャンプ運動への参与をとおして得た筆者の発見とその意義を明確化する。

最後に終章では本稿全体の議論を総括し、序論で提示した「カテゴリと共存の問い」に対する本稿の答えと、積み残された課題を明確化する。オルタ論の視点に立ち、生活運動において創発的にうまれる先住民と非先住民の連携に着目してきた本稿では、異なる人びとが互いの内実に踏みこみ、互いの価値規範の深い理解や共感に至らずとも成立する共存をとらえた（5章）。植民地化以後、同じ社会空間を共有せざるをえなくなった先住民と非先住民に必要なのは、両者を結合させる強力な統合主義ではなく、対立や分離的契機を見据えた関係の再構築である。カテゴリ的対立・分離を否認するのではなく、逆にそればかりに囚われてしまうのでもないゆらぎが、異なる人びとの共存を可能にする。これが、「カテゴリと共存の問い」に対する本稿の答えである。

だが他方で、4章でみた再起の思想からは、もう一步踏みこみ、互いの価値を問いなおしながら相互変容していくような先住民－非先住民間の交流の可能性も示唆された。筆者が観察した運動空間でこうした交流が実地にみられなかったのは、当該の空間がまだあたらしく先住民－非先住民の信頼関係が十分に醸成されていない、筆者の観察期間に限られている、といった要因も手伝っていると思われる。そのため、本稿の範囲内では価値に踏みこまずに間身体的次元でうまれる共存の姿をとらえたが、この事例に限ってもより長期の観

察をおこなえば、そうではない可能性もみえてくるかもしれない。また本稿では両者の日常的共存に光を当て、価値の異なる両者に対立の契機がありながらも身体経験を介してあらたな関係がはぐくまれることをみた。しかし対立や立場性の相違のあらわれといった側面の記述がまだ断片的なものにとどまるために、この日常的共存がどれほどの安定性のあるものなのかなど、十分にそのニュアンスを明らかにできなかった。こうした記述の不十分さを埋めるための調査データの拡充が、本稿が今後の課題として積み残したものである。